

「希望」と「韓国」
「マイ」

目次

一、 希望

二、 韓国ドラマ

*
*

希望

希望について

例えば、パンドラの箱を開けて、最後に残ったものは、まさに「希望」であったが、その「希望」さえあれば、われわれは、まだ十分に生きていける。しかし、その「希望」さえも絶たれてしまうと、それは、まさに「絶望」へと堕ちていくしかない。しかし、われわれは、たとえ「絶望」へと堕ちても、いわゆる完全なる「絶望」ということはあり得ない。なぜなら、何らかの「希望」を抱かずに、われわれ人間は、一時たりとも生きてはいられないからである。それは、例えば、今、まさに死んでいくような人でさえ、何らかの「希望」を抱いているものである。それは、なぜなのか？ それは、われわれ生命体は、絶えず生きようとしている。そのように「絶えず生きようとしている生命体」は、たとえいかなる「状況・状態」におかれても、なお「生きようとしている」ものだからである。それゆえ、たとえ「絶望」のどん底にうち沈んでいても、なお最後の「望み」を捨てることはできない。しかし、その最後のかすかな「望み」さえも絶たれてしまうと、最後の最後の最後には、「諦め」という心的状態になるかと思うが、そのような心的状態に落ち込んでも、なお「希望」を捨てることはできない。なぜなら、それが、まさに「生命体の生きようとする本能（遺伝子）の働き」だからである。それゆえ、「自殺」という行為は、まさに「生命体の生きようとする本能（遺伝子）の働き」に、敢えて「逆らう行為」になるということである。

それでは、「希望」そのものというのは、一体、どういうものになるのかと問えば、それは、次のようなものになるかと思う。つまり、われわれ人間にとって、いわゆる「これがなければもう生きられない」というような、まさに最後の最後の「光」さえも消えてしまえば、われわれ人間は、もう生きられないということである。それゆえ、「希望」そのものというのは、消えるということがないものである。——例えば、『マッチ売りの少女』という作品では、最後、売れ残った「マッチ箱」からマッチ棒を一本一本燃やしては、一つは、「暖かな火（ストーブ）」を想像し、一つは、「美味しい料理」を壁越しに想像し、そして、最終的には、一つの流れ星をきっかけに、優しくったおばあちゃんのことを想い出し、そのおばあちゃんの胸に抱かれながら死んでいくという、それは、一体、何を意味するのかと問えば、それこそは、まさにその「マッチ売りの少女」が、心の底から望んでいた、それは、まさに最後の最後の「希望」そのものであったということである。

そして、それをもつと言えば、生きるための最少限度の「衣食住」というものは、もちろん、どうしても必要不可欠なものではあるが、それに加えて、いわゆる「暖かな家庭」というものがなければ、小さな子供たちというのは、まさに「生きられない」ということである。つまり、小さな子供たちにとって最も大事なものは、すなわち、何よりも「暖かな家庭」というものであり、その「暖かな家庭」というものこそは、小さな子供たちが心の底から望んでいる、まさに「希望」そのものなのである。

例えば、有名な『フランダーズの犬』というテレビのアニメなども、その内容を辿れば、やはり、やさしい「おじいちゃん」が生きている間は、幸せであったが、そのおじいちゃんが亡くなり、いわゆる「暖かな家庭」というものが崩壊したあとは、少年ネロと一匹の犬（パトラッシュ）は、それでも一生懸命に生きようとがんばるけれども、結局は、「生

きられなかった」ということである。——それは、小さな子供から少年少女（つまり「子供たち」）が生きていく上で、最も大事なものは、すなわち、何よりも「暖かな家庭」というものであり、その「暖かな家庭」というものは、小さな子供から少年少女（つまり「子供たち」）が安心して生きていける、まさに「希望の光」そのものである、というものである。

*

*

心の底

灯る明りぞ

希望かな

韓国プログラム

韓国ドラマについて

例えば、われわれは、ふだんテレビを見聞きしている時に、何か「不快に思うような場面や言動など」に出つくわすと、もちろん、そのままその番組を見続ける場合もあるだろうが、一方、ほかに何かやっていないかと、チャンネルを切り換えてしまうような場合も多いかと思う。——つまり、視聴している人たちにとって、いわゆる「面白いものや心惹かれるようなもの」であれば、積極的に見聞きしようとするが、一方、なにか「不快やつまらないなあと思うような場面や言動」などに対しては、むしろ「拒絶反応を示すような傾向」があるという、まさに、そういう「大原則」があるということである。

そのようなことを踏まえて、韓国ドラマを見聞きすると、韓国ドラマというのは、実に「ほどよく抑制が利いた言動になっている」ということである。つまり、視聴者が見聞きしていて、明らかに「不快や嫌悪感を感じるような言動」などは、極力避けられているために、多くの人たちは、ずっと「その画面を見聞きしていられる」ということである。——例えば、ある人たちにとっては、何でもない「言動」でも、ある人たちにとっては、不快に感じるような「言動」があり、何でもない人たちは、そのまま見続けるだろうが、不快に感じているような人たちは、そこで見聞きするのをやめて、ほかの番組へとチャンネルを切り換えてしまうということもあるのだろう。つまり、「韓国のドラマ」の最大の特徴というのは、まさに「役者の言動がほどよく抑制が利いている」ので、誰が見聞きしても、それほど「不快を感じる」ことの少ないような「言動」になっているということである。

そして、もう一つの「極めて大きな要因」は、何かと問えば、それは、何よりも「見た目のよい人たち」が中心的な役を演じているということ。それは、極めて大事なことであり、それこそは、視聴している人たちをまさに「無条件で惹きつける最大の要因」になっているということである。だからこそ、「韓国ドラマ」は、今、世界中で人気を博し、好意的に「受け入れられている」最大の要因になっているのである。つまり、「韓国ドラマ」の最大の特徴は、一つは、まさに「役者の言動がほどよく抑制が利いている」ので、誰が見聞きしてもそれほど「不快を感じる」ことの少ないような「言動」になっているということ。一つは、「映画」や「ドラマ」というのは、まさに「表情芸術」と呼ばれているものであり、役者の「顔の微妙な表現」一つで、その「ドラマ」の善し悪しが決まると言ってもよく、その点から見ても、韓国の中心的な「役者」は、それなりの演技力を持っていて、しかも、映像表現も魅力的で美しい。そして、もう一つは、何よりも「見た目のよい人たち」が中心的な役を演じているということ、それこそは、視聴している人たちをまさに「無条件で惹きつける最大の要因」になっているということである。もちろん、できのよいドラマもあれば、そうではないドラマもあるだろうが、できのよいものは、脚本の面白さを初めとして、役者の演技力や相関係の多重性、或いはドラマの展開の面白さ、その他、いろいろいな要素が、複合的に作用し合って相乗効果を上げているということである。

例えば、ふざけるにも、ふざけすぎない。笑うにしても、笑いすぎない。泣くにしても、泣きすぎない。怒るにしても、極端に怒りすぎない。喜ぶにしても、自然で魅力的な喜び方にする。しらけるにも、しらけすぎない。醜くなるほどの極端な表情は、なるべく避ける。音楽なども魅力的で、より効果的に使っている。地が出て、しらけさせるようなことはしない。あくまでも役に徹している、その他、そのように「ほどよく抑制が利いている

演技（言動）であり、極端にはみ出した演技（言動）などは少ない」ので、見聞きしている人たちも、そのままずっと見聞きしていられるということである。

例えば、今は、まさに「自然な演技」が大事とされているが、しかし、その「自然な演技」というのは、何も「演技」をしないということでは決してなく、しっかりと「演技」はしているながらも、それがあまりに「自然なので演技をしているように見えない」というのが、まさに「本来の意味合い」になるかと思う。また、役者は、どうしても「真実味^{リアリティ}」を出そうとして、とかく「過剰な演技」になりやすいが、それは、映画や舞台のような「外で見る」場合であれば、それは、それでもよいが、しかし、いわゆる「テレビドラマ」というのは、ごく日常の「家庭生活」のなかで見ているものであり、それゆえ、あまりにも極端な「演技」は、逆効果であり、必要以上の「過剰な演技」は、むしろ「グロテスク」になってしまい、見る方も、逆に、引いてしまうようなことが多いのだろう。

また、昔の「映画」や「ドラマ」というのは、多くの場合、主人公やヒロインなどに見えるだけ魅力的でカッコいい台詞^{セリフ}などを言わせて、誰もが心惹かれるような理想的な役を演じていたかと思うが、今は、そのような主人公は、一体、どこへ行ってしまったかと言えば、それは、実は「漫画^{マンガ}」の主人公やヒロインとして、華々しく、魅^{よみがえ}っているのであり、しかも、今や「映画」や「ドラマ」などは、その人気を失い、一方、「漫画^{マンガ}」や「アニメ」こそは、まさにその「全盛期」になっているということである。

*

*

ところで、一時期、韓国ドラマの多くは、まず、何々グループの会長が出てきて、その会長の「息子なり娘なり孫なり」が、多くは、主人公かヒロインとなり、そして、例えば、主人公が男性であれば、その相手役の女性は、多くの場合、あまり恵まれていない環境か、ふつうの環境で育ち、その女性が会長の息子（孫）などと「恋愛関係」になっていくという、まさに「シンデレララブストーリー」になっていて、それは、いつか「白馬に乗った王子様が現われて、自分を幸せにしてくれる」という、観ている数多くの女性たちの「夢をドラマで疑似体験させてくれるようなもの」であったということである。

そして、今はともかく、一時期の韓国ドラマは、主人公の男性には、必ず、その主人公に思いを寄せている女性がいて、その女性と相手役の女性との間で「三角関係」になり、また、主人公の男性には、多くはライバル的な存在がいて、そのライバル的な男性と相手役の女性それに主人公の男性との間で「三角関係」になったりとともに、四人の中心人物、一人は、主人公の男性、一人は、その相手役の女性、一人は、ライバル的な男性、そして、もう一人は、そのライバル的な男性と親しい女性か、主人公の男性に思いを寄せている女性、この「四人の男女のからみ」によってこそ、ドラマが展開していくという「ストーリー」になっているというのが、まさに最も「基本的なパターン」になるかと思う。——もちろん、多種多様な「ドラマ」があり、それゆえ、多種多様な「ドラマ展開」になっているものではあるが、意外に、その「骨組み」は、いわゆる「四人」（或いは三人の男女のからみ）になっている場合が多いということである。もちろん、それに加えて、家族間の「骨肉の争い」などもからんでくるが、ここでは省略したいと思う。

*

*